

不思議なお茶

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校 4年（群馬県）

石原 千智

えっ、苦くない。むしろあまいかも。

私は部活動見学に行ったとき、先輩の出してくれたお茶に一口で惚れて茶花道部に入部した。右も左もわからず先生には指導されてばかりで、先輩にできない後輩だと思われたらどうしようと、初めは不安ばかりだった。なかなかお点前は覚えられない上に、同期の友達にも先に行かれてしまう感じがして自分には才能がないのかもと思った。でも、そんなとき私を助けてくれたのもお茶だった。

あいさつをして、お茶碗を選ぶ。先生に指導されながらゆっくりお茶を点てる。すると不思議なことに、「このままでいいや」と思えてしまう。それ以上に打ち付ける雨の音や、カタカタと窓をゆらす風がいとおしく感じるのだった。ああ、空にはこんな顔があったんだ、といつもの自分では気づくことのできない「なにか」に気付かされるのだ。なぜだろうと思いつつ時間が過ぎた。

ある日、母に茶花道部に入部したのだからお点前をしてほしいと頼まれた。普段は先生に指導されてばかりで手順なんて覚えている訳がないと思い緊張していたら、手がするすると動いてくれたのだ。私は手の動くまま簡単な茶道セットを使ってお湯を入れる直前までいった。すると、

「なんて楽しいんだろう」

私の心がそうつぶやいた。独り言なんて言うタイプではないし、お茶に集中していたはずなのに、心の声が聞こえた。その時、点と点がつながった。そうだ、お茶は見えないなにかを写してくれる。私はお茶を点てることを通して、私自身と対話をしていたのだ。それだけでないかもしれない。自然とも一体になれているように私は思う。一碗のお茶を通して、雄大な自然に抱かれ、自分の心と向き合い、私をとりもどしているんだ。私はようやくお茶のおいしさだけでなく、そのお茶が持つ力に気づくことができたのだ。私の顔が静かに点てる前のお茶に写っていた。

私はお茶は日常のほんの少しだけ先にある非日常だと思う。お茶室は、地球と人間が対話できる不思議な空間、お茶に出会えて、日々に彩りが増し、本当に良かったなと思っている。